

月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり。舟の上には生涯を浮かべ、馬の口とらえて老を迎ふる者は、日々旅にして旅を極とす。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか、片雲の風に誘はれて、漂白の思ひやまず、海浜にさすらへ、去年の秋、江上の破屋に蜘蛛の古巢を払ひて、やや年も暮れ、春立てる霞の空に白河の関越えんと、そぞろ神の物につきて心を狂はせ、道祖神の招きにあひて、取るもの手につかず。ももひきの破れをつづり、笠の緒付けかへて、三里に灸すゆるより、松嶋の月まづ心にかかりて、住める方は人に譲り、杉風が別墅に移るに、

28 Q 現代版

草の戸も住みかはる代ぞひなの家

表八句を庵の柱に掛けおく。

—— 興の細道 序 松尾芭蕉

詩歌史に「俳諧」というジャンルを打ち立て、わが国最大の詩人の一人といわれる松尾芭蕉。その生涯はほとんど旅の中にあつたことから、漂泊の詩人とも呼ばれます。『興の細道』は江戸深川の家を処分し、東北地方から北陸へ六百里を旅する紀行文の名作。自身が旅人であるばかりでなく、すれ違い去っていく歳月そのものも旅人だという有名な言葉で始まり、「古人も多く旅に死せるあり」と、李白や西行などの客死を暗示します。格調高いリズムミカルな文体で、いぶし銀のように底光りする無常観を伝えていきます。

月日は百代の過客にして、行きかふ年もまた旅人なり。舟の上には生涯を浮かべ、馬の口とらえて老を迎ふる者は、日々旅にして旅を極とす。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか、片雲の風に誘はれて、漂白の思ひやまず、海浜にさすらへ、去年の秋、江上の破屋に蜘蛛の古巢を払ひて、やや年も暮れ、春立てる霞の空に白河の関越えんと、そぞろ神の物につきて心を狂はせ、道祖神の招きにあひて、取るもの手につかず。ももひきの破れをつづり、笠の緒付けかへて、三里に灸すゆるより、松嶋の月まづ心にかかりて、住める方

詩歌史に「俳諧」というジャンルを打ち立て、わが国最大の詩人の一人といわれる松尾芭蕉。その生涯はほとんど旅の中にあつたことから、漂泊の詩人とも呼ばれます。『興の細道』は江戸深川の家を処分し、東北地方から北陸へ六百里を旅する紀行文の名作。自身が旅人であるばかりでなく、すれ違い去つ

輝華漢御幾慶崎尋飛
様染年邦あいうえお
輝華漢御幾慶崎尋飛
様染年邦あいうえお

活字で使われていた清朝体をデジタルフォントとして初めて復刻しました。復刻版は四号清朝体でできる限り忠実に再現。現代版は古風なイメージを残しつつJIS字形にほぼ準拠し、さらにかなを10%大きくデザインしています。「復刻版」「現代版」の2書体セットです。

行春や鳥啼魚の目は泪

日々旅にして
旅を
すみかどす。

日々旅にして
旅を
すみかどす。